

音楽教育における「Universal Design」

M.R. シェーファーの「サウンド・エデュケーション」を切り口として

三郷市立栄中学校 教諭 石川 裕貴

I はじめに

1 音楽の「普遍項」

「Universal」すなわち「普遍項」とは、哲学が探求する事象そのものの原理である。そして、音楽の普遍項を探求することとは、「音楽とは何か」を根源的に問うことに他ならない。

1950 年以降、「音楽とは何か」という根源的な問いに対する答えを追究すべく、比較音楽学や民族音楽学を中心に、〈音楽〉の普遍項について調査されてきた。異なる音響文化から記述的に採取したデータに内在する主音、中心の有無 (McAllester 1971)、主題と変奏、繰り返し、拍子等の構造原理の有無 (Blacking 1973)、聴取、理解、学習等の知覚行動の普遍項 (Harwood 1976) 等の規則性が探られてきた (Nettle 1983)。しかし、その音楽行動の複雑性により〈音楽〉の普遍項の発見には至っていない (Blacking 1973)。つまり、義務教育で必修となっている音楽科であるが、「音楽とは何か」という根源的な問いへの答えは、学術的に明らかとなっていないのである。

2 「Universal Design」と「サウンド・エデュケーション」

「Design」とは、今、目の前にないものを創り出すことである。カナダの作曲家、音楽教育者の R.M. シェーファーは、1960 年代、音を風景の一部として捉え、自然音や環境音、騒音等の人工音も含めた「社会を取り囲む様々な音の相対」として「サウンドスケープ」という概念を提唱した。この「サウンドスケープ」を基盤として音や音楽を「Design」していく音楽教育メソッドが、「サウンド・エデュケーション」である。

シェーファー (Schafer 2005, p. 11) は、「サウンド・エデュケーション」を提唱する上で、今日の音楽教育の問題点について、以下の 7 点を挙げている。

- 1) 外国の音楽ばかりに価値を置く。
- 2) 他人が創った音楽に価値を置く。
- 3) 高度な技術を要求するので、子どもたちは音楽本来の喜びを忘れる。
- 4) 高価な音楽に価値を置き、安価な素材は無視される。
- 5) コンサート以外の音楽を理解できない。

6) 音楽は科学、他の芸術、環境とつながりが無く孤立している。

7) 教師は娯楽産業に無力である。

シェーファーは、今日の音楽教育が、外国かつ他人が創った音楽に依存し、高度な技術や高価なもの（楽器、施設等）を要求しているため、子どもたちにとっての普遍的な音楽ではないことを批判した。「音楽とは何か」という根源的な問いの答えが明らかとなっていないにもかかわらず、特定の地域や時代の音楽に偏重した音楽教育の在り方に対し、シェーファーは警鐘を鳴らしたのだった。

この批判は、公正性や柔軟性、エラーへの寛容性、身体への非負担性等を原理とする「Universal Design」(Mace 2018) やインクルーシヴ教育システムの構築のための「障害の状態や発達の段階に応じた指導や支援」(文部科学省 2018, p. 96) とともに親和性がある。

そこで、ヨーロッパの特定の時代の音楽の再現を基盤とせず、「サウンド・エデュケーション」を通して、子どもたちが簡素で直観性に富む自らの音楽、失敗に寛容で身体に負担をかけない「万人のための音楽」を創作することが、「Universal Design」への切り口のひとつとなり得るのではないかと筆者は考えた。

3 学習指導要領による「音環境」

『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 音楽編』(2018) では、「内容の取扱い」における配慮事項として、「自然音や環境音などについても取り扱い、環境音への関心を高めることができるよう指導を工夫すること」(p. 99) が明記されている。機能的和声に基づく西洋音楽にとらわれない「自然音」や「環境音」を音素材として用いるなかで、音楽科の目標である「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」(p. 6) の育成へとつなげていくことが明記されている。

以上を踏まえ、本研究では、自然音や環境音に基づく「サウンド・エデュケーション」を切り口として、生徒たちによって音楽の「Universal」を「Design」していく音楽教育を実践することが、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」の育成に貢献するかどうか検証する。

II 研究の仮説

- 1) 「サウンド・エデュケーション」を通して、自然音・環境音に着目しながら、生徒たちによって「Universal Design」された音楽づくりを行うことができるだろう。
- 2) 「サウンド・エデュケーション」を通して、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することができるだろう。

III 研究の方法

自然音や環境音を基盤とした「サウンド・エデュケーション」の実践における参与観察および「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化との関わり」に関するアンケート調査を行い、研究の仮説に対する検証を行う。

1 参与観察

参与観察とは、調査者が対象者のフィールドへ直接参加し、インフォーマントへインタビューを行い、その記録を分析する調査方法論である（Denzin 1965）。本研究は、R.M. シューファー、今田匡彦著『音さがしの本：リトル・サウンド・エデュケーション』（2009）（以下、『音さがしの本』）の中から、〈サウンドウォーク〉〈音の日記〉〈図形楽譜の創作〉を実践し、生徒たちによって「Universal Design」された音楽づくりの参与観察を行う。

調査対象は、【表1】のとおりである。

【表1 参与観察における調査対象】

実施期間	令和6年11月～12月（5時間）
調査者	筆者（音楽科教諭）
インフォーマント	三郷市立栄中学校第2学年147名

インフォーマントは全4クラスで、ピアノ経験者8名、吹奏楽部員4名、ダンス経験者が数名、音楽に苦手意識を持つ生徒多数と、様々な生徒が混在する。

2 アンケート調査

授業実践の事前および事後に、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化との関わり」に関するアンケート調査を行い、授業実践を通して生徒たちの意識や学びなどがどのように変容したのか分析する。アンケート調査の内容は、①音楽教育における「Universal Design」について、②日常での「音環境」との関わりについての2つに分類される選択式の回答、そして、自由記述式の回答である。

アンケート調査の調査項目は、【表2】のとおりである。

【表2 アンケート調査の調査項目】

調査項目	点	回答内容
(1) 音楽の授業では、専門的な知識や技能がなくとも音楽活動を行うことができる。…①	4	そう思う。
	3	どちらかといえばそう思う。
	2	どちらかといえばそう思わない。
	1	そう思わない。
(2) 音楽の授業では、自分の考えを自由に音や音楽で表現することができる。…①	4	そう思う。
	3	どちらかといえばそう思う。
	2	どちらかといえばそう思わない。
	1	そう思わない。
(3) 生活のなかで、耳に入ってくる身の回りの音や音楽の特徴を意識している。…②	4	そう思う。
	3	どちらかといえばそう思う。
	2	どちらかといえばそう思わない。
	1	そう思わない。
(4) 身の回りの音と生活や社会との関わりを理解している。…②	4	そう思う。
	3	どちらかといえばそう思う。
	2	どちらかといえばそう思わない。
	1	そう思わない。

選択式の回答については、事前と事後の回答の変容を数値により比較する。また、それぞれの回答を4段階とし、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の順に4、3、2、1と得点化する。そして、4と3をポジティブな回答、2と1をネガティブな回答として2つに分けた上で、ポジティブの度合いを検証する。結果の信頼度については、ポジティブな回答数を得る偶然確率を「直接確率計算 1×2 （正確二項検定）」で有意検定を行う。

自由記述式の回答については、記述した内容をカテゴリー化し、生徒たちの音楽や音楽教育に対する意識や学びの変容について読み解く。

IV 授業の構成

1 教材名

「鑑賞から表現へ～図形楽譜の作成～」（全5時間）

2 教材観

『音さがしの本』の〈サウンドウォーク〉および〈音の日記〉による鑑賞活動を行い、強弱やリズム、音色等、「音楽を形づくっている要素」の特徴を知覚する。そして、実際に聴いた自然音や環境音もとに〈図形楽譜の創作〉を行い、創作した〈図形楽譜〉から身近な音素材を用いて音楽を創作し、毎毎にアンサンブルを行う。

〈サウンドウォーク〉とは、誰とも会話せずに一人の空間を保ち、周囲の音すべてを聴きながら歩く活動

である。班毎にまとまって活動し、一人がファシリテーターとして即興的にコースをデザインし、班員はそれに導かれ校内外を探索する。音楽室に戻ってきた後、「どのような音が聴こえたか」「印象に残った音の特徴はどのようなものか」といった音の特徴を意見共有し、環境音と「音楽を形づくっている要素」との関係进行分析する。

〈音の日記〉とは、生活の中で聞こえてきた音を、日記として記録する活動である。1週間分の〈音の日記〉を記録し、〈サウンドウォーク〉同様「どのような音が聴こえたか」「印象に残った音の特徴はどのようなものか」を意見共有する。

〈図形楽譜〉とは、図形などを用いて自由に描かれた楽譜であり、五線記譜法では表現しきれない新しい音楽を創造する手段として、或いは既成の西洋音楽の概念を打ち壊す作業の一環として用いられたものである。今回は、〈サウンドウォーク〉や〈音の日記〉で知覚・感受した環境音や生活音を、点や線、多角形等、図形として表現し、それを楽譜に見立てて演奏活動を行う。授業の展開は、【表3】のとおりである。

【表3 授業の展開】

時	●学習内容【領域・分野】◇教師の働きかけ
1	<p>●〈サウンドウォーク〉を行う。【鑑賞】</p> <p>◇誰とも話さず、静かに音に耳を傾けるよう指示する。</p> <p>●聴こえた音の「音楽を形づくっている要素」の特徴を探る。【鑑賞】</p> <p>◇音の特徴を記述し、「音楽を形づくっている要素」のどれに該当するか思考・判断させる。</p>
2	<p>●〈音の日記〉をもとに、生活音の「音楽を形づくっている要素」の特徴を探る。【鑑賞】</p> <p>◇1校時目同様、「音楽を形づくっている要素」のどれに該当するか思考・判断させる。</p> <p>●〈サウンドウォーク〉や〈音の日記〉をもとに、〈図形楽譜〉を作成する。【創作】</p> <p>◇音の特徴を絵や記号ではなく、図形で表現することを意識させる。</p>
3	<p>●班毎に作成した〈図形楽譜〉を分析する。【創作】</p> <p>◇図形楽譜の読譜や演奏の仕方を、班毎に話し合って決めさせる。</p> <p>→音楽の【Universal Design】の構築</p> <p>●身の回りの音の鳴るものを用いて音楽づくりを行う。【創作】</p> <p>◇「誰が」「何を」「どのように」表現するの分析させる。</p>
4	<p>●班毎に創作した作品を練習する。【器楽】</p> <p>◇失敗を恐れず、様々な音を出して試行錯誤するよう声がけする。</p> <p>●リハーサルを行う。【器楽】</p>
5	<p>●班毎に創作した作品を発表する。【器楽】</p> <p>◇班毎の〈図形楽譜〉をテレビ画面に映して鑑賞する。</p> <p>●発表を聴き、〈図形楽譜〉と「音楽を形づくっている要素」の関係について批評し合う。【鑑賞】</p> <p>◇ワークシートだけでなく、実際に共有し合う場面を設ける。</p>

1時間目は、〈サウンドウォーク〉による鑑賞活動を行う。2時間目は、宿題として実施した〈音の日記〉をもとに、鑑賞活動の結果を分析する。その後、記録した音を図形で表現し、それを楽譜と見立てた〈図形楽譜〉を作成する。3時間目は、班毎に作成した〈図形楽譜〉を分析し、筆箱やクラブ等、身の回

りの音の鳴るものを用いて創作活動を行う。4時間目は、班毎に創作した音楽作品の練習とリハーサルを行う。5時間目は、班毎に創作した作品を発表し、〈図形楽譜〉と「音楽を形づくっている要素」の関わりについて批評し合う。

3 指導観

〈サウンドウォーク〉や〈音の日記〉は、自然音や環境音に耳を傾け、音そのものの特徴を聴き取る活動である。自然音や環境音には、西洋音楽のような和声や調性の機能の有無に関わらず、音の高低や強弱、リズム、音色の違いなど、様々な「音楽を形づくっている要素」が包含されている。〈図形楽譜〉は、点や線、図形などが複雑に交錯し合うだけでなく、時間の経過においても左から右へ読むような西洋音楽的な規則が無いため、即興性のある自由な演奏解釈が可能となる。

これらの特質を踏まえ、本研究では、自然音、環境音を鑑賞し分析する際は、「音楽を形づくっている要素」に着目した言語活動を展開していく。また、〈図形楽譜の創作〉では、教師側の発言によって生徒たちの活動が矮小化されないよう、あくまでファシリテーターとしての役割を意識し、固定概念を押し付けることなく、生徒たちが音楽を「Universal Design」できるよう支援していく。

V 研究の分析と考察

1 参与観察

〈サウンドウォーク〉では、どの生徒も自分の空間を保ち、校舎の中や校庭、草むらの上などを自由に歩いていた。その後、聴こえた音やその特徴について、全体で意見共有すると、「空から鳥の鳴き声が聴こえた。高い鳴き声が短いリズムを響かせていた」「教室の声の響きに耳を澄ますと、高低差や声色が特徴的だった」「ベランダから聴こえた機械音が一定の音程で響き渡っていた」などの意見が挙がった。音の高低差やリズム、声色や機械音といった音色等、「音楽を形づくっている要素」をもとに特徴を捉えていた。

〈音の日記〉では、それぞれ音の記録とその特徴を「音楽を形づくっている要素」をもとに分析していた。〈音の日記〉では、【写真1】の分析が見られた。

【写真1 生徒による〈音の日記〉】

1. 音の日記をやってみよう。音楽を形づくっている要素とどのような関わりがあるかな？

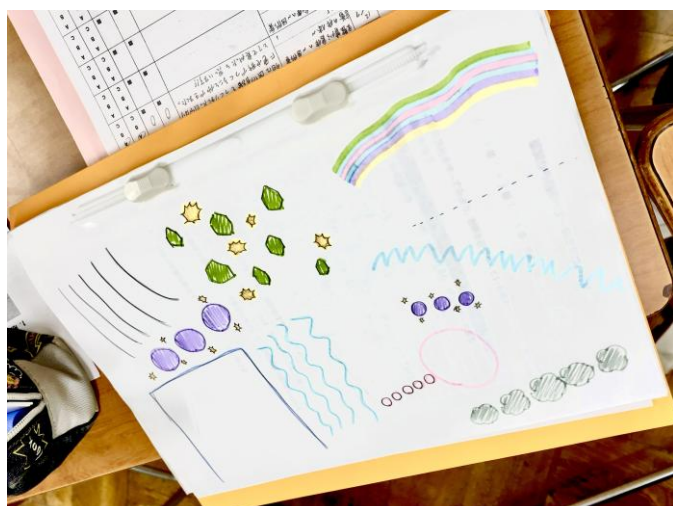
聴こえた音	その音の特徴
(例)換気扇の音	(例)一定のリズム、少しこもった音色
車音	近づくとき大きな音で、遠ざかると小さくなる
目覚まし時計	一定のリズム、金属のこもった音
電車の音	一定のリズムとテンポ、間がある
歩く音	一定のリズム、歩く場所によって音色が変わる
電子レンジの音	短い、大きな音、温めている時は一定

音の強弱
リズム、音色
リズム、速度
速度、音色
強弱、リズム

「車の音」では、「近づくとき大きな音で、だんだん小さくなる」と記述している。「音」の遠近法によるダイナミクスを感受し、強弱を知覚したことが分かる。「電車の音」では、「一定のリズムとテンポ、間がある」と分析している。リズムと速度が一定に保たれていることを知覚するとともに、「拍の頭から次の拍の頭までの間の一時的な距離」（文部科学省 2018, p. 118）を指す「間」に着目し、記述している。

〈図形楽譜の創作〉では、〈サウンドウォーク〉や〈音の日記〉で知覚・感受した自然音や環境音を図形にする際、最初は戸惑っている生徒がほとんどだったが、机間支援を行い、一つ一つの音のイメージする色や形について対話していく中で、それぞれ思い思いの〈図形楽譜〉を完成させていた。【写真2】は、ある生徒が創作した〈図形楽譜〉である。

【写真2 生徒が創作した〈図形楽譜〉】



〈図形楽譜〉をもとにした班毎の音楽づくりでは、様々な色や形の図形を、筆箱やペットボトル、創作楽器等を持ち寄り、どこから楽譜を読み進めていくのかといった読譜の仕方、音の鳴らし方や組合せ方、誰から始まってどのように音楽を終えるのかといった楽曲の構成など、生徒たちが自らルールを設定し、班毎に協働して創意工夫する様子が見受けられた。

最後の授業での班毎に創作した作品を発表し、〈図形楽譜〉と「音楽を形づくっている要素」の関わりについて批評し合う活動では、発表者はテレビ画面に映された〈図形楽譜〉を見ながら発表し、聞き手は〈図形楽譜〉の読譜の仕方や演奏における「音楽を形づくっている要素」について分析した。その後、それぞれの意見を全体で共有した。

【写真3】は、〈図形楽譜〉の発表の様子である。

【写真3 〈図形楽譜〉の発表の分析】

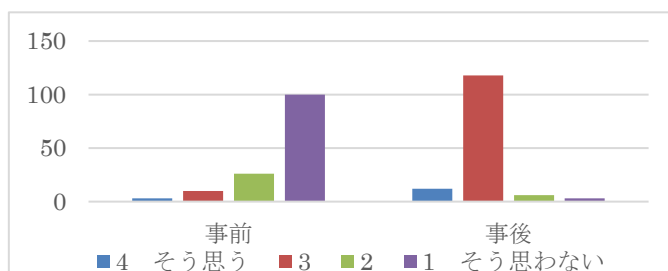


〈図形楽譜〉における読譜の解釈や、それに伴う「音楽を形づくっている要素」の知覚・感受において、演奏者と聞き手で違いが生じていたことが、全体での意見共有から明らかとなった。このことから、どの班も意図をもって演奏をしていたということ、そして聴き手によって音楽の感受の仕方が多種多様だということが示された。

2 アンケート調査

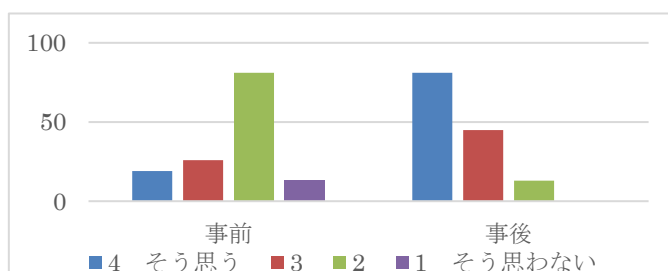
事前および事後アンケートにおける選択式の回答結果は、【表4】【表5】【表6】【表7】のとおりである。

【表4 調査項目1の変容（音楽活動ができるか）】



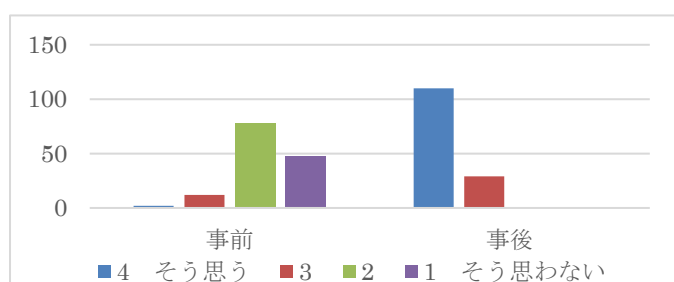
	事前アンケート				事後アンケート			
回答	4	3	2	1	4	3	2	1
人数	3名	10名	26名	100名	12名	118名	6名	3名
分類	ポジティブ		ネガティブ		ポジティブ		ネガティブ	
結果	13		126		130		9	

【表5 調査項目2の変容（自由に表現できるか）】



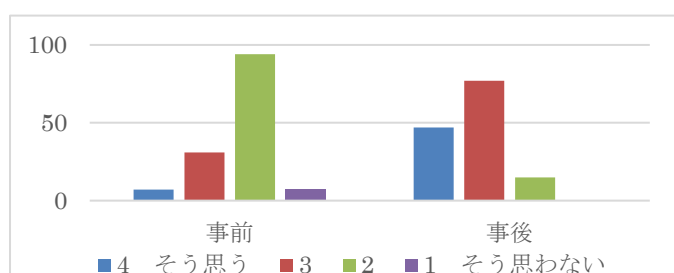
	事前アンケート				事後アンケート			
回答	4	3	2	1	4	3	2	1
人数	19名	26名	81名	13名	81名	45名	13名	0名
分類	ポジティブ		ネガティブ		ポジティブ		ネガティブ	
結果	45		94		126		13	

【表6 調査項目3の変容（音環境への意識）】



	事前アンケート				事後アンケート			
回答	4	3	2	1	4	3	2	1
人数	2名	12名	78名	47名	110名	29名	0名	0名
分類	ポジティブ		ネガティブ		ポジティブ		ネガティブ	
結果	14		125		139		0	

【表7 調査項目4の変容（社会と音楽との関連）】



	事前アンケート				事後アンケート			
回答	4	3	2	1	4	3	2	1
人数	7名	31名	94名	7名	47名	77名	15名	0名
分類	ポジティブ		ネガティブ		ポジティブ		ネガティブ	
結果	38		101		124		15	

この結果は、授業を欠席していた8名を除いた結果 (n=139) である。

事前アンケートでは、すべての調査項目において、ネガティブな回答がポジティブな回答より上回る結果だったのに対し、事後アンケートでは、すべての調査項目において、ポジティブな回答がネガティブな回答より上回る結果となった。特に、調査項目3については、139名全員がポジティブな回答だった。

事後アンケートにおけるそれぞれの結果について、ポジティブな回答の割合が偶然確立より有意に高いかを確認するため、正確二項検定を実施した。その結果、調査項目1のp値が 2.4×10^{-20} 、調査項目2のp値が 1.4×10^{-17} 、調査項目3のp値が 9.6×10^{-20} 、調査項目4のp値が 1.6×10^{-15} と、それぞれポジティブ回答率は偶然に起こる確率が極めて低く ($p < 0.01$)、統計的に有意であることが示された。

また、事前および事後アンケートにおける自由記述式の回答をカテゴリ化し、表にまとめたものが、【表8】【表9】のとおりである。

【表8 事前アンケートの自由記述】

1. 歌唱が好き／得意 (33名)
2. 器楽が好き／得意 (25名)
3. 創作が好き／得意 (2名)
4. 鑑賞が好き／得意 (33名)
5. 音楽の授業が好き／得意 (35名)
6. 歌唱の困難さ (66名)
7. 器楽の困難さ (36名)
8. 鑑賞（聴取や批評）の困難さ (14名)
9. 自由に音楽表現することへの不安 (47名)
10. 音楽経験の有無による差を感じる (5名)
11. 無回答 (7名)

【表9 事後アンケートの自由記述】

1. 音楽の視野が広がったこと (77名)
2. 創作が難しいというイメージの払拭 (45名)
3. アンサンブルすることの楽しさ (57名)
4. 身近な音素材を用いることの楽しさ (48名)
5. 自然音や環境音、生活や社会の中の音や音楽への意識化 (67名)
6. 今回の学びが他の領域・分野（合唱や鑑賞）へと生かすことができるということ (34名)
7. 音楽経験の有無にかかわらず音楽表現を工夫することができたこと (22名)
8. 無回答 (1名)

事前アンケートでは、ポジティブな回答からネガティブな回答まで様々な記述が見られたが、全体的にネガティブな回答が多い傾向にあった。特に、最も記述の多かった6については、「正しい音程で歌うことが難しい」「声変わりで歌うことが難しくなった」「人前で歌うことに抵抗がある」などの理由が挙げられた。

事後アンケートでは、無回答以外のすべての回答がポジティブな回答であった。とくに、1) 合唱や楽器演奏だけが音楽ではないという気づき、2) 自らルールを設定し、協働して創意工夫しながら創作することの面白さ、3) 生活や社会の中の音や音楽への意識化、4) 合唱や鑑賞等、他の領域や分野へと今回の学びを生かそうとする態度、これらの記述が顕著であった。

3 考察

仮説1)の検証結果として、〈サウンドウォーク〉や〈音の日記〉をから知覚・感受した「音楽を形づくっている要素」をもとに、〈図形楽譜の創作〉に取り組んだことで、読譜の仕方、音の鳴らし方や組合せ方、楽曲の構成など、生徒たちが自らルールを設定し、毎に協働して創意工夫することができた。また、アンケート調査から、「サウンド・エデュケーション」を通して、西洋音楽の専門的な知識や技能を必要とせずとも、音楽活動に参加することができたと実感する生

徒や、自分の考えを自由に音や音楽で表現することができたと実感する生徒が増加したことが明らかとなった。このことから、「サウンド・エデュケーション」を通して、自然音・環境音に着目しながら、生徒たちによって「Universal Design」された音楽づくりを行うことができたといえる。

仮説2)の検証結果として、〈サウンドウォーク〉や〈音の日記〉を通して、生活音や環境音とその特徴を、「音楽を形づくっている要素」に着目しながら捉えることができた。また、アンケート調査から、「サウンド・エデュケーション」を通して、身の回りの音や音楽の特徴を意識したり、生活や社会との関わりを理解しようとしたりする態度が育成されたことが明らかとなった。このことから、「サウンド・エデュケーション」は、音楽科の目標である「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」を育成することに貢献するものだといえる。

そして、今回の音楽活動は、シェーファーが提唱する音楽教育の問題点や、「Universal Design」の原理、「インクルーシヴ教育システムの構築」をクリアしていることも、上記の結果から明らかである。それゆえ、簡素で直観性に富む自らの音楽、失敗に寛容で身体に負担をかけない「万人のための音楽」を創作する「Universal Design」への切り口のひとつだといえる。

VI まとめと今後の展望

本研究を通して、「サウンド・エデュケーション」が、音楽を通してしか学ぶことのできない創造性と「Universal Design」の原理を担保すること、そして、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」の育成において有効だということが明らかとなった。

19世紀最後の20年ほどで起きた日本の西洋化は、音楽においても大きな影響を及ぼした。元々日本に存在していた雅楽や長唄、民謡等を、西洋音楽のダイアトニックで読み解こうとしたが、日本の音律との非互換性から、音楽の和洋折衷の夢は潰れた。結果として西洋への自己植民地化の道を歩んだ(今田 2015)。

しかし、忘れてならないのは、先述のとおり、「音楽とは何か」という根源的な問いへの答えが学術的に明らかとなっていないということであり、音楽科教諭は、子どもたちとともに「音楽とは何か」という問いを追究していくことが重要である。西洋音楽は確かに音楽の一種ではあるが、音楽を相対化するものでもないければ、音楽の総体として包括するものでもない。しかし、西洋音楽自体も否定されるものでもないことな

ど言うまでもない。だからこそ、『中学校学習指導要領解説 音楽編』に記載されているとおり、「特定の活動のみに偏らないようにするとともに、……各領域や分野の関連を図る」(p. 95)ことで、音楽科の目標である「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力……を育成する」(p. 9) 必要があるのである。

今後の展望としては、音楽教育において誰一人取り残さない「万人のための音楽」を追求していくために、他者と協働するなかで「Universal Design」を担保することができるよう、1)「サウンド・エデュケーション」を含む、様々な音楽ジャンルによる音楽活動を、指導計画にどのように位置づけていく必要があるのか、2)授業のどの段階でどのような発問や机間支援が必要なのか、3)ワークシートやICT機器等、どのような教具の工夫が求められるのか、引き続き実践を積み重ねるとともに、検討していきたい。そして、一音楽科教諭として、音楽科の存在意義に対するアカウンタビリティに伝えていきたい。

【引用・参考文献】

- Blacking, J. (1973) *How Musical Is Man?* Seattle: University of Washington Press.
- Denzin, N. K. (1965) *The Research Act (3rd edn)*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Harwood, D. (1976). *Universals in Music: A Perspective from Cognitive Psychology*. *Ethnomusicology* 20 No. 3, pp. 521-533.
- McAllester, D, ed. (1971). *Readings in Ethnomusicology*. New York & London: Johnson Reprint Corp.
- Nettle, B. (1983). *The Study of Ethnomusicology*. Chicago: University of Illinois Press.
- Schafer, R. M. (2005) *HearSing*. Ontario: Arcana Edition.
- The RL Mace Universal Institute (2018) *Principles of Universal Design*. <http://udinstitute.org/principles.php> (Accessed August 20, 2025)
- 今田匡彦(2015)『哲学音楽論：音楽教育とサウンドスケープ』恒星社厚生閣。
- シェーファー, R.M., 今田匡彦 (2009)『音さがしの本：リトル・サウンド・エデュケーション』春秋社。
- 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領解説(平成29年度) 音楽編』教育芸術社。